

# 平成 21 年度事業報告について

## 1. 文化財研究所事業

### (1) 埋蔵文化財の調査及び報告書作成

発掘調査事業（〔 〕は昨年度、個別の事業は一覧表参照）

平成 21 年度の発掘調査は契約数 115 件〔97〕件、調査面積 23,629〔14,017〕m<sup>2</sup>、受託額 814,765,733〔588,747,715〕円（税抜）であった（埋蔵文化財収蔵遺物整理業務を含む）。前年比で受託件数は 18.5%、面積では 68.6%、金額では約 2 億 2 千 6 百万円の増加となった。報告書作成受託収入と合わせた委託元別の金額比率は、大阪市関係が 72.45%〔61%〕（59〔35〕件）、大阪府関係が 2.22%〔16%〕（1〔7〕件）、国が 7.88%〔4%〕（3〔4〕件）、民間が 17.45%〔19%〕（61〔63〕件）となった。20 年度は大阪市からの受託額が総額約 4 億 7 千万円弱であり、21 年度は総額約 6 億 4 千 5 百万円に増え、引き続き大阪市からの受託額が最大となった。民間事業者からの受託は約 1 億 5 千 5 百万円で、前年度並みであった。

本年度のおもな発掘調査成果には以下のものがある。難波宮跡の中枢部周辺では、史跡整備事業によって、朝堂院東側に奈良時代の瓦葺き建物が存在することが明らかとなった。現地説明会を開催して（1 月 10 日 / 約 500 人）調査を公開した。また、特別史跡大坂城跡の整備事業では、昨年度に引き続いて山里丸の調査を行い、豊臣期大坂城の石組溝などを発見した。そのほか、弥生時代では長原遺跡で後期末の井戸や方形周溝墓などの遺構とともに多量の遺物が出土し、古墳時代では西中島遺跡や大坂城下町跡で前期に遡る遺構・遺物を多数発見したほか、喜連東遺跡で 4 基・長原遺跡で 2 基の古墳を発見した。古代では上本町遺跡で奈良時代の難波京条坊に係る橋脚を始めとした重要な発見があった。中世では阿倍寺跡を調査し伽藍に係る遺構は検出できなかったが、古代瓦が出土したほか、天神橋遺跡で井戸や土壙が見つかった。

### 報告書作成事業

平成 21 年度は合計 8 冊の報告書を刊行した。『瓦屋町遺跡発掘調査報告』、『殿辻遺跡発掘調査報告』、『難波宮址の研究』十六、『西淡路 1 丁目所在遺跡発掘調査報告』、『山之内遺跡発掘調査報告』、『堂島蔵屋敷跡発掘調査報告』、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』、『天満本願寺跡発掘調査報告』V である。これらのうち、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』は昨年度に報告書作成業務を受託していたものである。ほか、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』の報告書作成作業を行った。以上の受託金額は約 7 千 6 百万〔1 億 8 千 6 百万〕円で、昨年度の約 41%となった。

このほか過年度調査（28 件）の報告書作成作業を行った。

	発掘調査受託事業				報告書作成受託事業			合計	
	件数	面積	受託額		件数	受託額			
国関係	2	3,340	67,916,000	8.34%	1	2,293,000	3.01%	70,209,000	7.88%
大阪市	52	10,899	576,804,733	70.79%	7	68,761,000	90.17%	645,565,733	72.45%
	( 1)	-	( 30,391,000)						
大阪府	1	700	19,732,000	2.42%	-	-		19,732,000	2.22%
民間	60	8,690	150,313,000	18.45%	1	5,202,000	6.82%	155,515,000	17.45%
合計	115	23,629	814,765,733	100.00%	9	76,256,000	100.00%	891,021,733	100.00%
過年度						18,620,000			

「大阪市」には、( )内の埋蔵文化財収蔵遺物整理業務を含む

表 平成 21 年度発掘調査・報告書作成受託事業の内訳

## ( 2 ) 文化財関連施設の管理受託

昨年度に引き続き、難波宮史跡公園及び 5 世紀代建物、大阪市埋蔵文化財収蔵展示室の日常的な管理を行った。難波宮史跡公園及び難波宮資料展示室の見学依頼は 69 [ 75 ] 件あり、1,510 [ 1,605 ] 人の見学に対応した。そのなかにはガールスカウト日本連盟大阪府支部の史跡公園清掃奉仕 ( 6 回 200 人 [ 242 ] 人 ) や、市内小学生 ( 10 件 732 人 ) などがある。同様に大阪市埋蔵文化財収蔵展示室 ( 長原調査事務所併設 ) でも、市内小学生 ( 3 件 276 人 ) をはじめに 52 [ 43 ] 件、576 [ 620 ] 人の見学に応じた。

また、平野区の大阪市埋蔵文化財収蔵倉庫などの整理作業を行い、文化財の収蔵状況を系統的に調査して、外部からの資料の閲覧・貸出依頼に対応できるよう保管位置や中身について確認した。

## ( 3 ) 文化財の保存処理・分析、学芸員による他団体への協力

保存処理・分析に関しては、大阪府下 8 件、大阪府以外の近畿圏 1 件、近畿圏外 4 件の事業を受託した。近畿圏外では、高知県、鳥取県、岐阜市、名古屋市がある。処理の対象となったのは木製品や金属製品である。以上の受託額は 8,320,878 [ 10,213,100 ] 円であった。

他団体の活動へは、なにわの海の時空館へ引き続き学芸員 1 名 ( 平成 21 年 11 月未まで )、( 財 ) かながわ考古学財団へ学芸員 1 名 ( 平成 21 年度 1 年間 ) が協力した。

## ( 4 ) 文化財の普及啓発

### 講演会・シンポジウム

大阪歴史博物館における金曜夜の「金曜歴史講座」を主催し、12 回計 1,619 人 [ 12 回 / 1,400 人 ] が参加した。シンポジウムでは「畿内の都城と大道」( ( 財 ) 大阪府文化財センター・大阪歴史博物館と共催 ) を開催した。また、( 財 ) 大阪市文化財協会の設立 30 周年を記念して講演会「都市大阪の成り立ちを語る - 遺跡・発掘・文化財 - 」を開催した。

## 国際交流

(財)大阪市文化財協会と大韓民国(財)嶺南文化財研究院の交流 10 周年を記念したシンポジウム「古代嶺南と大阪の出会い - 道路・土器・鉄器 - 」を韓国で開催し、司会・講師・通訳として学芸員 7 名(うち 2 名は大阪歴史博物館)が参加した。また、文化庁の博物館・美術館向け支援事業のため大阪歴史博物館とともに実行委員会を組織し、「資料が語る日韓交流史を通じたミュージアム事業「古代新羅土器と近世薬種業を中心に」」の展示・国際シンポジウムを通して韓国国立大邱博物館・(財)嶺南文化財研究院と交流を行った。

## 地域講座と地域連携

外部からの依頼で、当協会が企画して講師を派遣した連続講座として、おもなものには大阪市教育振興公社「いちょう大学 大阪の歴史と考古学」(5 回:旭区)、平野区誌出版記念連続講座「わがまち平野区 そのなりたちを学ぶ」(5 回:平野区)、平野区画整理記念会館 住民大学講座「古代の水と人のかかわり」(7 回:平野区)、平野区生涯学習講座「長原遺跡を歩く」(1 回:平野区)、阿倍野区地域協働学習プログラム「阿倍野区歴史講座」(5 回:阿倍野区)、大阪市立住吉人権文化センター「“大阪を学ぼう” おおさか考古学百景」(11 回:住吉区)などがあり、合計 12 件の講座に対し、35 人の講師を派遣した。また、民間団体や区民など外部団体との共催またはその依頼により、4 回の時限展示を区役所区民ギャラリーなどで行った。

地域のイベントへの参加・協力では「中央区民まつり」(難波宮資料展示室見学:34 人)、平野区「長原ふるさとまつり」・「六反長原古代市」への参加(遺物資料展示・ワークショップ開催)などがある。また、昨年度に引き続き、難波宮史跡公園を会場とした「アクションペインティング 2009 in 難波宮」、「難波宮フェスタ! 2009」を市民団体と連携して実施した。

## 学校連携

難波宮跡における大阪市内小学生を対象とした「体験発掘」(6 校)、「なにわ歴博 わくわく子供教室」(体験発掘)を大阪歴史博物館と共同して企画・実施した。また、平野区の市立中学校の依頼による職業体験学習を長原調査事務所で受け入れた(3 名)。その他、大学非常勤講師への講師派遣を行った。

## 「関西・考古学の日」の開催

全国埋蔵文化財法人連絡協議会の近畿ブロックで連携し、各団体が計画した展示、講演会・講座、遺跡公開など考古学の普及啓発事業を共同で広報・宣伝する企画を実施した。9 月~11 月の 3 ヶ月間で、中核行事として 10 月 10 日に「関西・考古学の日記念 関西考古学 50 年 - 考古学の発展と遺跡の保存を語る - 」を開催した。共同のホームページやチラシを活用し、各参加団体を巡るスタンプラリーを開催することで市民の関心を高め、多くの参加者を得た。

## 資料の活用

大阪歴史博物館での特集展示「新発見！なにわの考古学」は 8 回目を数え、速報性や話題性を重視して約 400 点の遺物を展示した。また、(財)大阪市文化財協会が依頼を受けて制作した大阪市内の企業・公的機関・学校などにおける展示施設(「街角ミュージアム」)は 37 箇所、展示資料は 2,347 点を数え、本年度は、西成区役所区民ギャラリーや北区太融寺における常設展示を加えた。ほか、北区役所・港区コミュニティ協会・住之江区役所・平野区役所・平野区民センターの時限企画展の制作・協力を行った。

当協会が保管している資料の貸出は、特別展など短期貸出 19 [ 33 ] 件 417 [ 656 ] 点のほか、出版などのための写真・図の提供 78 [ 67 ] 件、資料調査・見学対応 20 [ 25 ] 件であった。

#### 情報発信

文化財情報誌『葦火』を年 6 回(139~144 号)刊行した。定期購読者は 153 [ 166 ] 人であった。ホームページでは講座や現地説明会などをはじめとするイベント、出版に関する情報を掲載した(21 年度接続 61,008 [ 49,723 ] / 累計 373,982 件)。

#### (5) 文化財に関する研究と支援・交流

大阪歴史博物館と合わせて科学研究費補助金として 10 [ 9 ] 件、2,561 [ 1,313 ] 万円を獲得した。図書は交換・購入により約 2,041 [ 1,900 ] 冊を受け入れ、その結果、協会図書は 74,641 [ 72,600 ] 冊で、外部の閲覧にも供した。

大韓民国を含む外部発掘調査機関への調査指導や文化財の研修会講師への招聘に対し、13 [ 24 ] 件、延べ 13 [ 36 ] 人を派遣した。

## 2. 大阪歴史博物館管理運営事業

大阪歴史博物館は、難波宮のサイトミュージアム、市民参加型の博物館、大阪の歴史と文化の情報センターを基本理念とする歴史系総合博物館である。これらの基本理念にもとづき、資料の収集・保管、調査・研究、常設展や特別展等の展示、地下遺構の保存と公開、教育普及事業、ボランティア事業、学習情報センター「なにわ歴史塾」の運営等の事業にあたった。

平成 21 年度の常設展入場者数は、前年度比 12.6%減の 180,558 人となり、また特別展を合わせた総入場者数は前年度比 6.1%減の 287,905 人であった。

### (1) 常設展示

常設展示「都市おおさかの歩み」では、各フロアやコーナーにおいて最新の発掘資料のほか、宝船・雛人形・大阪相撲など季節感を重視した資料、また開催中の特別展と関連した歴史資料や美術品などを適宜更新しながら展示内容の充実に努めた。また 8 階の特集展示室では、近年の修復品や寄付資料を紹介する展示のほか、特別展と連携したテーマでの展示(大坂の伊勢信仰)など、年間 7 本の特集展示を開催した。また学芸員による常設展示の展示解説は、土曜・日曜・祝祭日に実施し、1,539 人の参加を得た。

なお 6 階特別展示室の空き期間を活用し、常設展料金で観覧できる特別企画展「お菓子の博物館 初公開・山星屋コレクション」を昨年度から引き続き 4 月 6 日まで開催し、菓子に関するポスター・おまけ・菓子容器など関連資料約 400 点を展示した。

### (2) 特別展示

特別展については、本年度 4 つを開催した。その内訳は、自主企画展が 2 つ、巡回展が 2 つであった。自主企画展「 - 秘蔵のお宝一挙大公開 - 蔵出し 大阪歴史博物館名品展」は、館藏品と寄託品の中から国宝・重要文化財を中心に優品及び名品を選び、これまで公開の機会の少なかった文化財を展示した。もう一つの自主企画展「大阪の祭り - 描かれた祭り・写された祭り - 」は、江戸時代から現代に至る絵画作品や写真、モデルとなった祭りの道具などを通して、大阪府内の祭りの姿を示し、大阪の祭礼を紹介した。

巡回展の内、特別展「伊勢神宮と神々の美術」は、伊勢神宮において第 62 回を迎える式年遷宮を記念して開催したもので、伊勢神宮に伝えられている神宝類を中心に展示し、その歴史と信仰、過去における遷宮の状況とそれともなう伝統技術の継承や神道美術にも光を当て、日本古来の宗教美術の精華を紹介した。特別展「聖地チベット - ポタラ宮と天空の至宝 - 」は、チベットで発展した独特の魅力あふれる仏像・仏画などの密教美術、交流を示す中国陶磁器など、ポタラ宮をはじめとする多くの宮殿や寺院に保存されている至宝 123 件を展示し、チベットの歴史と文化の精髓を紹介した。

### (3) 教育普及事業

教育普及事業としては、市民の歴史学習を支援するため、金曜日夜の学芸員による「なにわ歴史博講座」や、文化財研究部との連携による「金曜歴史講座」のほか、「古文書講座」、近代建築を訪ね歩く「建築史探偵団」など、従来からの定番の講座や事業に加え、昨年度から始めた「歴史マップをつくろう講座」、NPO 法人との共催による「上町台地歴史講座」や「難波宮フェスタ2009」などを実施した。また「2009 優秀映画鑑賞会」など映画関係の事業を充実させ、新たな博物館利用者の開拓に努めた。教育普及事業への参加者総数は、前年度を上回り 18,404 人となった。

2階の学習情報センター「なにわ歴史塾」では、難波宮と大阪に関する図書・図録等(約 4,000 冊)や映像ライブラリー(ソフト約 100 件)の公開をおこない、学芸員が来館者の学習相談に応じた。

### (4) わくわく子ども教室

わくわく子ども教室は昨年度事業を継続して実施した。事前申込制の事業として小学校高学年を対象とした「考古学を体験しよう」(定員 50 人)は 5 回で 185 人の参加を得た。また中学生を対象とした「中学生版 歴史講座」(定員 50 人)は 6 回で 147 人の参加を得た。また常設展 8 階「歴史を掘るコーナー」で実施の「ミクロの世界をのぞいてみよう」には 1,770 人、「むかしの瓦の拓本体験」には 115 人の参加があった。1 階オープンスペースで月 2 回定期的に開催している「手作りおもちゃで遊ぼう」は、おもちゃ作りサポーターによる協力のもと 23 回実施し 1,380 人の参加者があった。また季節に合わせて開催した夏の「綿くり・糸つむぎ体験」には 237 人、正月の「凧づくりと凧あげ」には 19 人の参加を得た。

### (5) 学校連携

学校連携では、昨年度に引き続き「大阪市教員研修」(定員 30 人)を受け入れ、学芸員が講師となり、3 日間研修を実施した。また今年度新たに二つの研修を受け入れた。ひとつは大阪市教育委員会による「大阪市教師養成講座」(90 人)で、学芸員が講師を担当した。もうひとつは「大阪府教員初任者研修(社会体験研修)」で、3 人の教員を 2 日間受け入れた。中学生・高校生による職場体験としては、5 校 74 名(前年 2 校 27 名)を受け入れたほか、修学旅行等で当館を訪れる小中学生グループからの学習相談にも応じた。

なお体験発掘については、11 月 10 日から 13 日にかけて大阪市立淀川小学校など 6 校 14 クラス 409 人を対象に実施した。大学生の博物館実習については 8 月から 9 月にかけて延べ 12 日間で 12 大学 73 人を受け入れた。また博物館見学研修については 12 大学 353 人を受け入れた。

### (6) ボランティア事業

ボランティア事業については、市民参加型博物館をめざす事業の一環として、186 人の登録ボランティアにより、難波宮の遺跡をめぐるガイドツアー、常設展示での子どもスタンプラリー、古代衣装・文楽人形操り・明治の双六遊びなど 6 種のハンズオン、8 階の「歴史を掘る」コーナーでの考古学の体験学習を実施した。ボランティアの活動は休館日を除く 305 日で、延べ 5,690

人が活動をおこなった。なおボランティア活動の充実と来館者対応の向上を目的とした研修や他施設の見学など、年間 14 回の研修を実施した。

#### (7) 調査研究

調査研究については、難波宮と大阪学の研究を 2 本柱とした共同研究を実施した。昨年度から継続中の「難波京」と「淀川」に関する共同研究に加え、新たに「大阪の近代美術工芸」と「下郷コレクション」をテーマとする共同研究を立ち上げた。研究成果については「共同研究成果報告書」や「なにわ歴博講座」などをとおして発表した。また基礎研究としては、藪明山作品に関する調査・中村順平に関する研究・大阪と江戸との都市比較史研究・大坂町奉行書例規集の研究の 4 テーマを実施した。

外部資金による研究では、科学研究費補助金による研究として基盤研究(B) 1 本、基盤研究(C) 2 本、若手研究(B) 3 本の研究をおこなった。また「淀川」に関する共同研究に関わって(財)河川環境管理財団から助成金を得て、共同研究の一部をおこなった。

なお昨年度から引き続き、当館学芸員が難波宮研究の一環として、大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会と共同で史跡難波宮跡公園での発掘調査を実施し、1 月には市民を対象とした現地説明会を開催し、515 人の参加を得た。

#### (8) 資料収集保管

資料収集方針にもとづき、寄付申出のあった奥田弁治郎木像など歴史資料 523 点、曾根崎尋常小学校懐古図など美術資料 24 点、摂河泉の中世・近世瓦資料など考古資料 186 点、宝船絵葉書交換会アルバムなど民俗資料 7 点、樺都陸平関係資料など芸能資料 48 点、近鉄百貨店阿倍野店外装タイルなど建築資料 335 点、合計 1,124 点の資料収集をおこない、一部の資料は常設展示において公開した。また購入資料については、朝鮮通信使関係資料 1 点を収蔵した。

#### (9) 友の会

5 月に総会を開催するとともに、日帰り見学旅行 3 回、宿泊見学旅行 1 回のほか、「町人文化を歩く」「街道を歩く」「資料館を歩く」「大阪城の石垣を学ぶ」(新規)の 4 テーマのもと見学会など計 9 回の事業を実施した。また当館との共催による一般も対象とした「阿波木偶箱回し公演」を開催し、会員以外にも多くの来場者を得た。今年度の会員は 386 人で、昨年度から 27 人の減少となったが、各事業への参加者は増加傾向にある。なお当館は事業の企画や講師の派遣などをとおして友の会活動の支援をおこなった。

### 3. 大阪市立自然史博物館管理運営事業

大阪市立自然史博物館は、大阪の自然を出発点として、自然界のしくみと歴史を、自然と人とのかかわりを通じて追求することを基本として、調査研究事業、展覧事業、資料収集保管事業、普及教育事業を、有機的つながりを持たせつつ一体として取り組んでいる、社会教育機関である。平成21年度の常設展、特別展を合わせた総入館者数は、297,864人(うち有料71,502人)であった。また、普及教育事業の参加者総数は17,734人であった。

#### (1) 展覧事業

##### 常設展

「自然と人間」を基本テーマに、本館第1展示室から第5展示室では、それぞれ「身近な自然」「地球と生命の歴史」「生命の進化」「生物の多様性」「生き物のくらし」について展示を展開している。さらに、隣接する「花と緑と自然の情報センター」内の「大阪の自然誌」展示室においては、大阪の多様な自然をできるだけ枚挙した展示を行い、市民の学習室の一部としての機能も持たせている。

本館の常設展示は、1986年に改修された一部を除き、多くが1974年の開館当初のもので、内容の陳腐化・展示物の劣化が目立っている。平成18年度から19年度には、旧第4展示室と旧特別展示室をあわせて新第5展示室に更新したが、引き続き展示更新は実行できていない。中長期的な視野に立った系統的展示更新を企画し、実施に向けて検討している。

「ジオラボ」・「子どもワークショップ」・「自然史博物館探検クイズ」等の館内行事を実施し、来館者サービスにつとめている。

##### 特別展

自主企画展3件、新聞社との実行委員会による特別展1件を開催した

4/18～5/31 特別展

#### 1) 「世界のチョウと甲虫-岡村宏一コレクションのすべて」

(平成21年4月18日～5月31日 会期39日間)

元大阪工業大学教授岡村宏一氏(建築工学)のコレクション3万点を一挙に公開した。このコレクションは、大型で美しい種類や珍しい種類の標本ばかりでなく、すべてのグループにわたって、できるだけすべての種・亜種を網羅していることに特徴があり、学術的価値の高い稀有なコレクションとして内外に誇れるものである。

#### 2) 「ホネホネたんけん隊 ホネで学ぶ、ホネで楽しむ」

(平成21年7月4日～8月30日 会期50日間)

ミンククジラ、ジュゴン、ダチョウ、アホウドリ、アカウミガメなど、大阪市立自然史博物館で所蔵する標本を中心に、多数のホネの標本を展示すると共に、ホネを使って学んだり、ホネを楽しんだり、ホネを見る視点を提案した。同時にホネとかかわ



るさまざまな団体や専門家の紹介を行った。ホネには一般に不吉なイメージがあるが、その形に魅了される人も多く、生物の構造に興味を持った美術関係者をはじめ、これまで自然史博物館との接点が希薄であった多くの人々にも、興味を持っていただけたと考えている。

3) 「きのこのヒミツ：きのこで世界はまわってる」

(平成21年9月19日～11月3日 会期39日間)

キノコに代表される菌類は自然生態系の中で、あらゆる生物の死骸や排泄物の分解に関与し、次の生命へとつなぐ大切な役割を担っている。陸上の自然は菌類抜きには語れない。自然の中でのリサイクルの大切さは皆が知っていることであるが、これを具体的なキノコの生きざままで印象づけ、土に親しみ、自然の仕組みを知り、キノコを安全に楽しんでもらえる展示を企画した。

4) 「大恐竜展～知られざる南半球の支配者～」

(平成22年3月20日～5月30日 会期平成21年度 10日間)

(読売新聞大阪本社と実行委員会を組織し開催)

恐竜の起源は南半球であろうと考えられており、そこでの資料を抜きにしては恐竜進化について語ることはできない。また、恐竜の進化は超大陸パンゲアの分裂と同時代であったため、大陸分裂と深い関わりを持っている。本特別展の展示は、これらのテーマに基づく内容となっている。ティラノサウルスを始めとする、北半球の恐竜との比較もしつつ展示した。

特別陳列・出張展示など

新収資料の紹介などの小規模な特別陳列、友の会・学校・関係団体等との共催展等を随時開催した。

1) 「出張！自然史博物館：ホネホネ探検隊」

特別展「ホネホネ探検隊」の関連企画として、大阪市立図書館で展示と講演会を開催した。

【展示】

4/1(水)～5/20(水)：島之内図書館

4/1(水)～5/31(日)：此花図書館

4/1(水)～5/31(日)：生野図書館

5/1(金)～6/30(火)：住吉図書館

6/2(火)～7/1(水)：東住吉図書館

6/2(火)～7/30(木)：浪速図書館

6/5(金)～6/17(水)：中央図書館

7/1(水)～8/30(日)：東成図書館

8/4(火)～8/30(日)：住之江図書館

### 【講演会】

6/6(土)：中央図書館

8/5(水)：住吉図書館

#### 2) 「出張！自然史博物館：キノコのひみつ」

特別展「キノコのひみつ」の関連企画として、大阪市立図書館で展示した。

7/1(水)～8/30(日)：住吉図書館

5/1(金)～6/30(火)：東成図書館

7/16(木)～8/20(木)：阿倍野図書館

8/4(火)～9/16(水)：生野図書館

9/1(火)～10/31(土)：東住吉図書館

9/1(火)～10/31(土)：城東図書館

#### 3) 特別陳列「ヘルマン・ヘッセ昆虫展」～少年の日の思い出～

会期：平成21年12月5日～22年1月17日

会場：自然史博物館 本館2階 イベントスペース

#### 4) 特別陳列「深海生物の写真展」

会期：平成22年1月23日(土)～1月31日(日)

会場：自然史博物館 本館2階 イベントスペース

主催：大阪市立自然史博物館・独立行政法人海洋研究開発機構 助成：日本財団

海洋研究開発機構研究員による展示写真の解説：1/23(土)、1/24(日)、1/30(土)、1/31(日)

### (2) 調査研究事業

調査研究は博物館活動の根幹をなすものであり、学芸員の個別テーマによる研究をはじめ、「淀川水系の水質・生物調査」等の学芸課をあげて取り組み市民も巻き込んだ調査活動、「西日本自然系博物館ネットワークによるGBIF事業」等の博物館連携による調査研究を実施してきた。その成果は館で刊行する研究報告や学会誌で公表するとともに、特別展や講演会を通じて市民に普及した。

なお、文部科学省科学研究費補助金は基盤研究3件、若手研究2件の補助を受けた。その他の外部資金についても、5件の助成金を受けた

### (3) 資料収集保管事業

動物・植物・昆虫・化石・岩石・鉱物等の資料を、大阪を中心に日本全国、さらに必要に応じ海外からも収集してきた。収集した標本は低温燻蒸などを実施した後、温度湿度管理が可能な収蔵庫において、資料ごとに最適な環境で保管し、展示・研究活動に活用している。また、資料情報のデジタル化を進め、可能なものについては広く標本情報を公開している。

#### (4) 普及教育事業

市民が自然をより深く理解するためには、展示を見るだけでなく、野外で実物の自然に触れることも重要である。自然史博物館ではこのような観点から、多様な博物館利用者とその要望に応えるため、各種の普及行事を行っている。

また、行事の実施に際しては、自然史博物館のボランティアである補助スタッフの協力を得ている。補助スタッフは、「特定非営利活動法人大阪自然史センター」に委託して「自然史博物館友の会」会員の中から募集しており、行事ごとに事前研修、勉強会、打ち合わせ、企画会議、事後研修等を行った。

##### 野外行事

これまでに自然史博物館の行事に参加したことのない人を主な対象に、自然のおもしろさを野外で直接体験してもらい、自然に親しむ糸口をつかんでもらうことをねらいとした「やさしい自然かんさつ会」、大阪をとりまく地域を歩き、その地域の自然をさまざまな分野の観点から観察し、自然の特徴とそこを利用する人との関わりについて総合的に考えることを目的とした「地域自然誌シリーズ」、自然の中の諸事象からテーマと対象をしぼって観察することで、自然に対する理解をより深めようとする「テーマ別自然観察会」、長居植物園をフィールドとした毎月実施している「長居植物園案内」「長居植物園案内-動物・昆虫編」、博物館の裏庭を利用して、明治初期の大阪の平野部の自然環境を復元することを最終目標としつつ、その生物を継続観察している「ビオトープの日」がある。

##### 室内行事

生物・化石などを材料に、博物館に備え付けの研究機器を活用しながら、野外では行えない分析的な観察・実習を体験することにより、自然に対する理解をより深める「室内実習」、学芸員が自らの調査・研究の成果をもとに自然史科学に関する話題を市民に普及する講演会である「自然史オープンセミナー」、児童生徒が夏休みに採集して作成した標本の名前を教える「標本同定会」とその効果を高めるための「夏休み自由研究相談会」、展示だけでなく、研究施設・収蔵施設などを含めた館内見学や実習により、児童生徒が博物館と自然史科学に親しむきっかけを作ることを目的とする「ドキドキ子ども自然史ウォッチング」がある。また、一般の行事に参加することが少ない中学生・高校生を対象に、継続的な参加を意識した「ジュニア自然史クラブ」を運営している。

##### 講演会等の開催

上記のオープンセミナー以外に、自然史科学各分野の研究者を招いて、市民を対象にした講演会やシンポジウムを開催した

##### 来館者の学習支援

「花と緑と自然の情報センター」内に、図書閲覧・情報検索・標本閲覧・ビデオ閲覧のコーナーを設けるとともに、学芸員を配置し、来館者の質問等に対応している。一方、本館内のミュージアムサービスセンターにも学芸員を配置し、質問対応にあたりとともに、そこを博物館の学校対応の窓口・市民サークルへの窓口と位置づけている。常設展におけ

る「ジオラボ」「子ども向けワークショップ」「自然史博物館探検クイズ」は、来館者向けの普及事業と位置づけられる。

#### 学校教育との連携

「総合的な学習の時間」に応用できるテーマで、学校教員をはじめ教員を目指す大学生や自然観察会指導者を対象とした「教員・観察会指導者向け支援プログラム」を企画・実施した。また、学校向けに展示解説や標本など博物館資料の貸出しを行い、学校教育を支援してきたほか、Teachers Museum Network 等を通じて、博物館から学校教育現場への情報を発信し、学校教育現場のニーズ把握に努めてきた。

#### 市民との連携

自然史博物館は、昭和25年に自然科学博物館として発足した当初から、多くの市民と連携して活動を進めてきた。中でも、「自然史博物館友の会」（会員数 1746 世帯）並びに「特定非営利活動法人大阪自然史センター」と深く連携することで、博物館事業をより市民ニーズに即したものとし、かつ事業の内容を向上させている。

#### インターネットを利用した情報発信

自然史博物館では、インターネット導入後ホームページを開設し、逐次その内容を充実させることで、情報発信につとめてきた。また、多くの自然愛好家、研究者が館のメーリング・リストに参加し、情報を交換している、22年1月からは「Twitter」によって、自然史博物館の情報により手軽に接することができる環境を提供している。